

平成23年ホヤ類調査結果速報 No. 6

平成23年10月24日

北海道立総合研究機構函館水産試験場

協力機関：渡島北部地区水産技術普及指導所

胆振地区水産技術普及指導所

※この速報は函館水試HPでも見ることができます。

【アドレス：<http://www.fishexp.hro.or.jp/exp/hakodate/>】

10月6日～19日に、噴火湾沿岸各地区において、耳吊ホタテガイ付着物及びヨーロッパザラボヤ浮遊幼生の調査を行いました。

結果概要

各地区のヨーロッパザラボヤ付着重量が増加しています（図1）。礼文地区、森地区で、ホタテガイ1枚あたりの平均付着重量が30gを超えました。一方、多くの地区で付着個体数は、減少しています（図2）。浮遊幼生密度も減少しており（図5、表1）、ヨーロッパザラボヤの新たな付着は、終息に向かっています。

八雲地区以外の6地区では、昨年同時期より付着重量が増加し、昨年よりも広い範囲でヨーロッパザラボヤが付着したと考えられます（図4）。一方、一昨年の長万部～森地区、昨年の八雲地区のように、極端に付着重量が高い地区は見られません。

ヨーロッパザラボヤの付着状況は、地区内ではばらつきが見られることもあるため、各施設の付着状況に応じて、貝洗い等の対策を実施してください。

①付着重量

ヨーロッパザラボヤの平均付着重量が最も重かったのは、礼文地区で、ホタテガイ1枚あたり37.5g、次いで森地区で34.4g、八雲地区で22.4gでした（図1）。昨年の同時期と比較すると、八雲地区を除く全ての地区で、高い結果となっています（図4）。

②付着個体数

ヨーロッパザラボヤの平均付着個体数が最も多かった地区は、森地区で、ホタテガイ1枚当たり15.2個体、次いで落部地区で11.8個体、礼文地区で10.9個体でした（図2）。多くの地区で、付着個体数は減少しています。ヨーロッパザラボヤのサイズ組成を見ると、5mm以下の個体の割合は概ね低く、新しい個体の付着が少ないことを示しています（図3）。

③浮遊幼生密度

ヨーロッパザラボヤの幼生は海水1tあたり、森地区で13.3個体、礼文地区で11.0個体、虻田地区で17.0個体、室蘭地区で4個体でした（図5、表1）。前回の調査結果と比較して、全ての地区で減少しています。

問い合わせ先：函館水産試験場調査研究部 金森・馬場
TEL:0138-57-6074 FAX:0138-57-5991

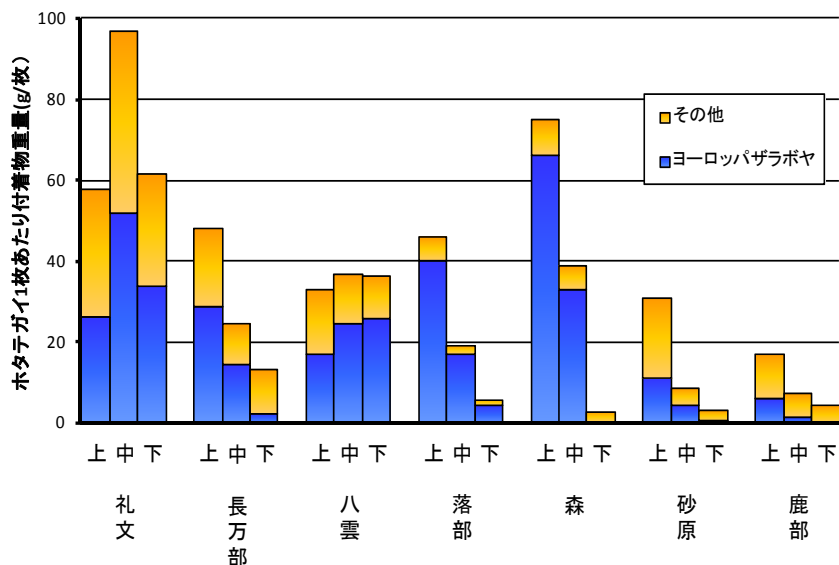
1：耳吊りホタテガイ付着物調査

〔調査月日：10月6日～19日、調査場所：礼文（礼文華沖，水深34m）長万部（大浜沖，水深43m），八雲（山崎沖，水深35m），落部（落部沖，水深45m），森（新川沖，水深45m），砂原（掛潤沖，水深70m），鹿部（出来潤沖）〔胆振指導所，渡島北部指導所，函館水試〕

ホタテガイを1連から上層，中層，下層ごとに5～10枚ずつ抽出し，肉眼及び実体顕微鏡を用いた観察により，付着物の識別，採取を行いました。付着物重量の測定は全てのサンプルで，ヨーロッパザラボヤ個体数の計数は各層5枚で行いました。また，ヨーロッパザラボヤの体サイズ測定は，各層3～5枚で行いました。

付着重量は，全ての地区で増加する一方，付着個体数は，多くの地区で減少しました（図1，2）。サイズ組成は，概ね25～35mmの個体が中心となっています（図3）。今年の付着重量を過去2年間の同時期と比較すると，礼文地区は，今年が最も高く，八雲地区は，今年が最も低い結果でした（図4）。長万部，落部，森，砂原地区では，一昨年よりも少なく，昨年よりも高い結果です。鹿部地区も昨年より高い結果となっています。なお，各地区の付着状況写真については，各指導所より配信されている調査結果速報を参照願います。

図1 付着生物調査結果（平成23年10月6日～19日）



参考：先月の付着生物調査結果（平成23年9月7日～15日）

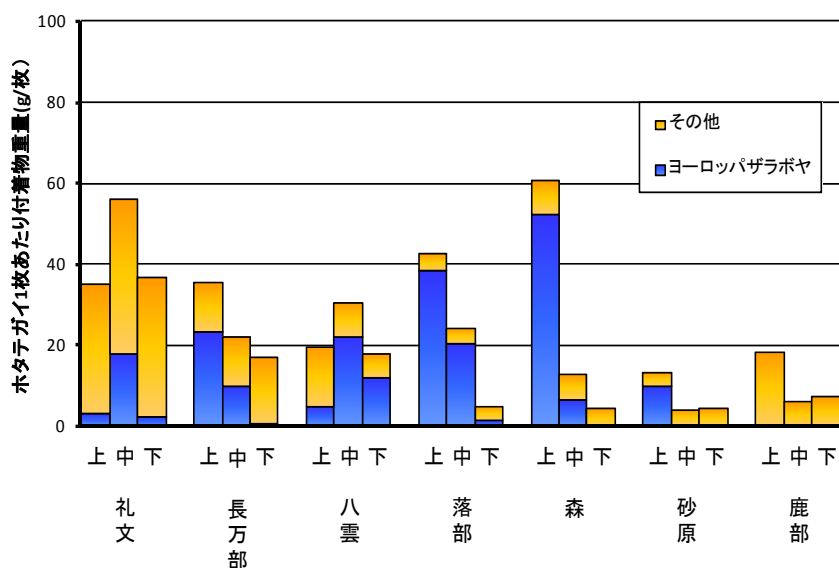
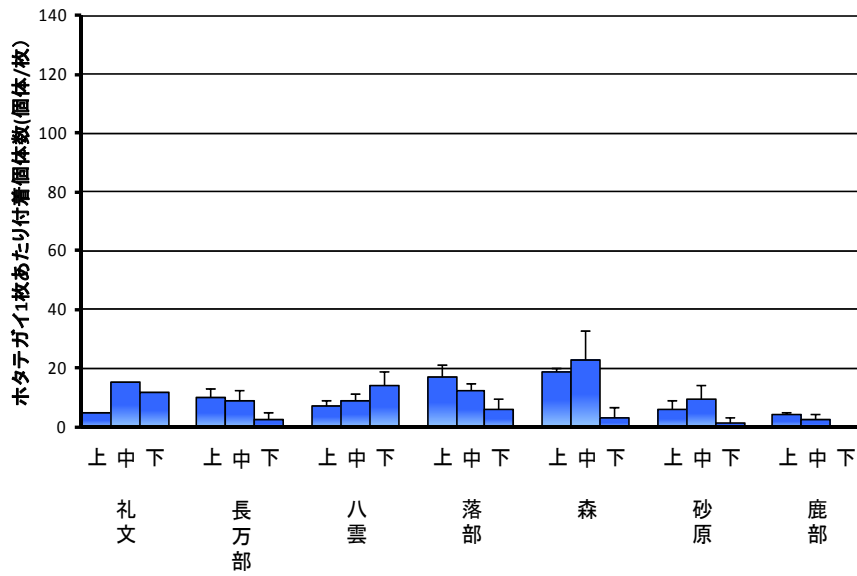


図2 ヨーロッパザラボヤの付着個体数（平成23年10月6日～19日）



参考：先月のヨーロッパザラボヤの付着個体数（平成23年9月7日～15日）

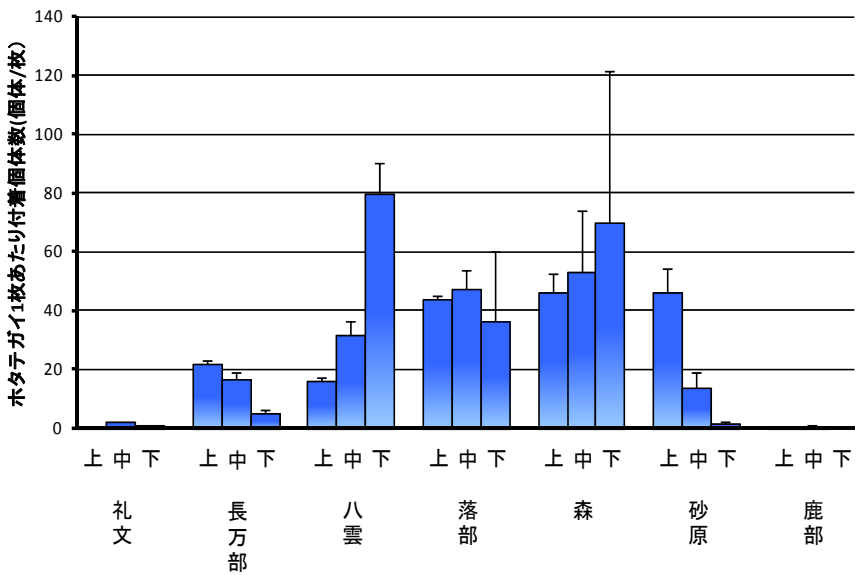


図3 ヨーロッパザラボヤのサイズ組成（平成23年10月6～19日）

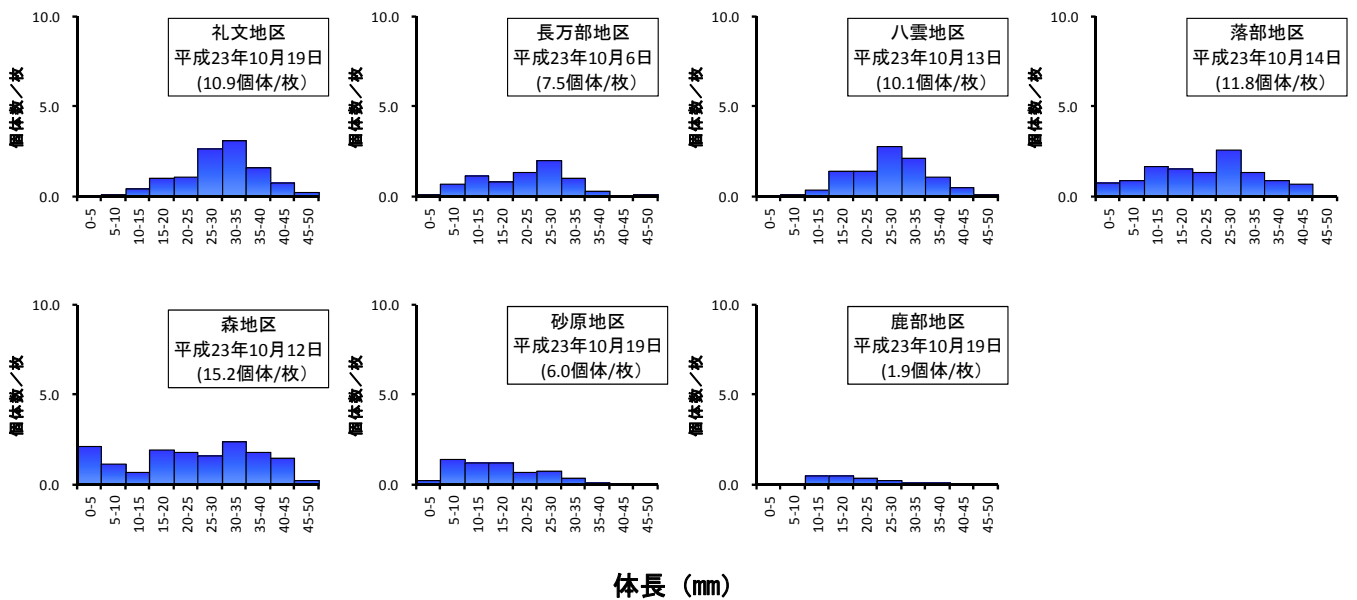
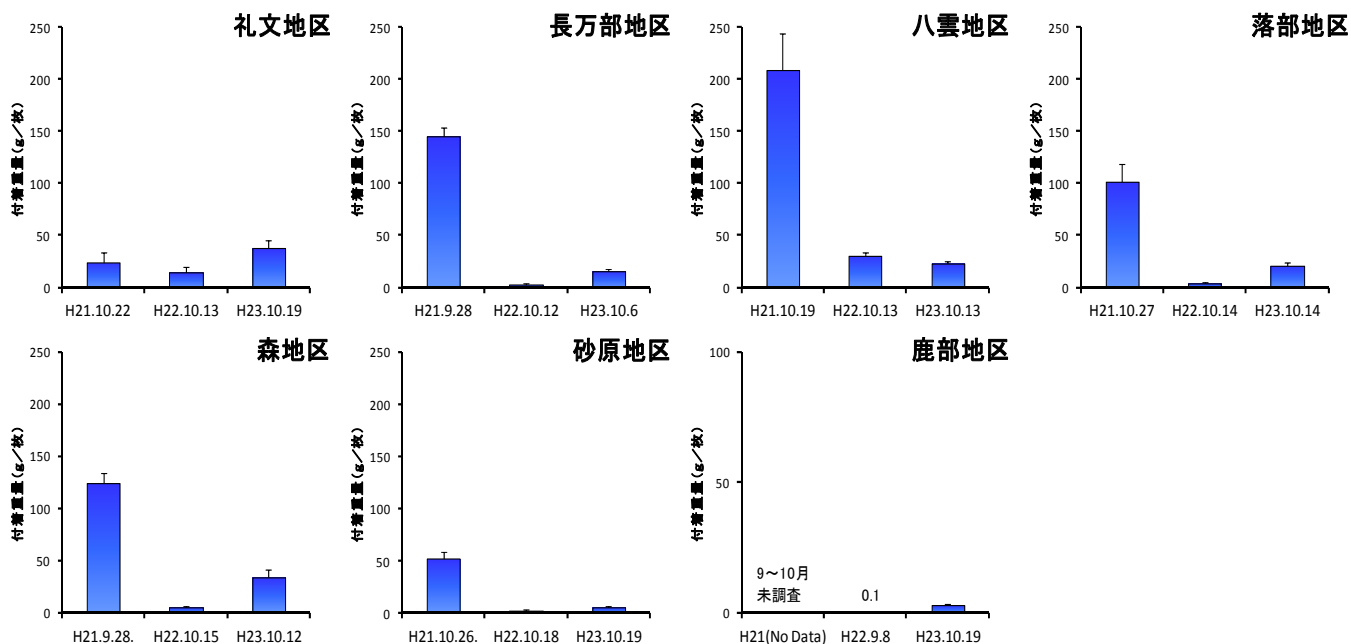


図4 各地区のヨーロッパザラボヤ平均付着重量の経年比較（平成21年～平成23年）



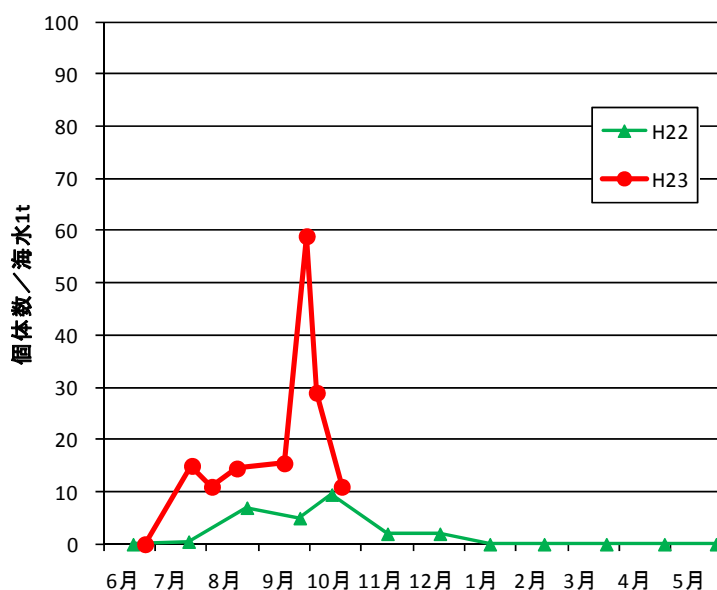
2：ヨーロッパザラボヤ浮遊幼生調査

2-1 礼文地区（礼文華沖合）調査結果(胆振指導所)

【調査月日：平成23年10月19日、調査場所：調査場所：礼文華沖水深24m、水深34m】

ヨーロッパザラボヤの幼生は、海水1tあたり11.0個体でした（図5）。昨年同時期の調査結果と比較すると高い密度ですが、前回調査から大きく減少しました。昨年も11月以降は浮遊幼生密度が減少しており、今後はさらに減少していくと考えられます。

図5. ヨーロッパザラボヤ幼生密度の経年比較（礼文地区）



2-2. 森、虻田、室蘭地区調査結果（渡島北部指導所，胆振指導所，函館水試）

10月6日～12日に森地区，虻田地区，室蘭地区で浮遊幼生調査を行いました。森地区のヨーロッパザラボヤ浮遊幼生は、海水1tあたり13.3個体でした。一方，虻田地区では17.0個体，室蘭地区では4.0個体でした（表1）。全地区で浮遊幼生密度は低下しています。

表 1 各地区の浮遊幼生調査結果（平成 23 年 10 月 14 日～19 日）

	森地区 (森漁港沖)	八雲地区 (八雲漁港沖)	礼文地区 (礼文華沖)	虻田地区 (中航路)	室蘭地区 (絵鞆沖)
調査日	10月14日	11月上旬	10月19日	10月19日	10月19日
調査点数	1	調査予定	2	1	1
ヨーロッパザラボヤ 浮遊幼生密度 (個体/海水1トン)	13.3	—	11.0*	17.0	4.0

*は 2-1 で記載した結果です。

参考：各地区の前回の調査結果（平成 23 年 10 月 4 日～12 日）

	森地区 (森漁港沖)	八雲地区 (八雲漁港沖)	礼文地区 (礼文華沖)	虻田地区 (中航路)	室蘭地区 (絵鞆沖)
調査日	10月6日	10月11日	10月4日	10月11日	10月12日
調査点数	1	2	1	1	1
ヨーロッパザラボヤ 浮遊幼生密度 (個体/海水1トン)	22.1	19.1	29.0	23.0	5.0

（参考）ヨーロッパザラボヤについて

平成 20 年以降、噴火湾の垂下養殖ホタテガイに大量に付着しているホヤは、外来種であることが判明し、ヨーロッパザラボヤと命名されました。ヨーロッパザラボヤの原産地は、北大西洋ヨーロッパ沿岸ですが、世界各地で外来種として報告されています。国内では、宮城県北部から北海道南部で発見され、養殖漁業への影響が懸念されています。なお、ヨーロッパザラボヤと外観がよく似たナツメボヤ科の在来種が、国内に広く分布しています。これらのホヤは外観から区別することは困難です。噴火湾以外の海域において、疑わしいホヤを発見した場合は、最寄りの水産技術普及指導所や水産試験場にお問い合わせ下さい。



写真 1, 2. ホタテガイ養殖施設およびホタテガイの殻に群生するヨーロッパザラボヤ
写真 3. 水中で入水孔、出水孔を開いた状態のヨーロッパザラボヤ